

## 第4回（仮称）彦根市多文化共生推進プラン策定委員会 会議録（概要）

### 1 開催概要

- (1) 日時 平成28年3月25日（木）14:00～16:15
- (2) 場所 第2委員会室
- (3) 出席 **【委員】** 森委員長、河瀬副委員長、臼杵委員、桂田委員、鈴木委員、多菊委員、董委員、平田委員  
**【事務局】** 大倉市民環境部長、小林市民環境部次長、綾木人権政策課長、浅田人権政策課課長補佐、人権政策課職員

### 2 議事

- (1) （仮称）彦根市多文化共生推進プラン（素案）について

### 3 内容（概要）

#### 【委員長】

今回が第4回の委員会ということで、今年度最後ということで本当に今日の議論を取りまとめた後に（指針）（案）を外して行って、実際にそれをこれから進めていっていただくことになる。これまでの進め方の中で皆さんにご指摘をいただきまして、なかなか至らないところがあったと思うが、なんとかここまできた。今日の議論を踏まえて、より良いプランになるように、ご協力をお願いしたい。

#### 【事務局】

本日の流れをご説明させていただく。まず、パブリックコメントの結果について、本プラン（指針）（案）への修正等について事務局からご説明させていただく。続いて、（仮称）彦根市多文化共生推進プラン（指針）（案）について、委員の皆さまからご意見いただきたい。

#### 【委員長】

それでは、議題（1）（2）関連しているので、先に事務局からご説明をお願いしたのち、議論に移りたいと思うので、まずは事務局からご説明をお願いしたい。

#### 【事務局】

資料説明

#### 【委員長】

誤字脱字や文言の修正、特に趣旨を変えずに、必要な変更はしていただいている。指針

の中で具体的な名前として出す必要はなくて、行動計画につめて考えたいと議論したことで、最後の全体を図るものという二つに関しては皆さんのご意見も後でいただきたいですが、一応それを考慮した上で必要な変更については変更した、ということだ。

議論は後で改めて一括してさせていただくので、文言修正を含めて、現状のプラン案についても、事務局から追加の分があるようなので、ご説明いただいた後に、もう一度パブリックコメントについての議論を一括してさせていただく。それでは、続けて事務局から、議題（2）のご説明をお願いしたい。

#### 【事務局】

資料説明

#### 【委員長】

追加の説明に対するご意見・質問を含めて、本プラン（指針）（案）の議論に移らせていただく。いくつか論点があると思うので整理しておく。

最初に皆さんにパブリックコメントの内容と、それに対する事務局の案としての対応に関して何かご意見がいただけたらというのが一点。もう一つが皆さんに事前にプランの修正、文言のところで気になる場所があればご意見をくださいということで、事務局からメールを配信している。

皆さんのご意見はご意見として、本委員会ですべて出していきたいと思う。もちろん全てそれぞれ委員の皆さんのご意向に沿えるかどうか分からないが、委員の皆さんのほうで言いつくしてないことがないように、色んな意見をいただいて、それを実際にプランにどう表現していくかを議論したい。

では、最初に、パブリックコメントについて事務局の対応についてご意見がある方はお願いします。

#### 【委員長】

文言として、表現として皆さんにご意見いただきたいのは、No. 4、9、10、11 について。皆さんのご意見をいただいて反映できると思う。対応としては、事務局の文言の表現の仕方としては4番に関しては、団体と連携はしていくが、具体的な団体名はこの指針に中では取り上げずに各種関係団体などの表現の中に含まれている。もちろん、連携する団体である認識はしているが、「ここと連携します」という文言を含めるわけではないと、市としては考えていますと書かれている。

9番の、公民館においても、公民館は関係団体と認識はしているが、公民館とは指針には書かずに関係団体とそれぞれ連携していくということにとどめておいて、行動計画などでは具体的に公民館との連携でどういったことができるか、ということを考えてきたいというニュアンスのことが書かれている。

10 番は、参画という言葉がいろんな所に使われていた。意見としては、参画という言葉がいいのではないかということだったのだが、文章を読んでいく中で、やはり参加のほうが望ましいところと、参画に直したほうが望ましいところがあったので、事務局案の中で参画のほうが望ましいと思うところは修正した。

11 番も同じで、行動計画に含めて考えていきたい、とのことだ。

**【副委員長】**

これはホームページだけか。パブリックコメントの全文が載るか。付け加えている資料まで載るか。出されたパブリックコメントがそのまま載るか。

**【事務局】**

ホームページに載るのは件数である。「何件提出いただいて、修正するのは何件。」ということに掲載する。

**【副委員長】**

市役所や公民館など、いくつかの場所にパブリックコメントを置かれた場所に、これは付けないのか。

**【事務局】**

付けない。件数については広報ひこねにも載せる予定である。

**【副委員長】**

市の考え方(案)の中で6番の下から2行目の「日本語が十分理解できない人がいます」ではなく「人もいます」と言うほうが柔らかい。

それと、「市の考え方」というのが、ここ委員会で、これでいいかを話し合っているので、「委員会で話し合った結果」ということか。「市の考え方」ではなく。そこは直したほうがいい。

**【委員長】**

一つ目のご意見は(指針)(案)の中の文言修正を含めてということ。プランの14ページ、教育の環境づくりの現状と課題の1文目の最後の「人が」ではなく「人も」の方が柔らかいのではないかというご意見だった。多数決をとるようなことではないが、どちらかに決めていかないといけないので、皆様のご意見をいただいてどちらか判断したい。「が」か「も」どちらがしっくりくるかなどのご意見をいただけたら最終判断がしやすいが。

**【委員】**

文化的背景の違いとは、受け入れ側の学校というか、日本の文化と外国から来られた方、外国にルーツを持っている方、子どもや保護者の母国との文化の違いということだ。

もし「日本語が十分に理解できない」にするなら、日本の文化が理解できないにするか、前半を生かすなら、言葉の違いがあるということにしたらいい。前半は違いといているのに、後半は日本語が十分に理解できないとなっているのでおかしい。

#### 【委員】

「そのことは」というのは、日本語が十分に理解できない人を指しているのか、文化的背景の違いを指しているのか、はっきりしない。

#### 【委員長】

今の意見では、線を引かれている上の文章のほうが説明としては適切であるというご意見ともお伺いできるので、パブコメのほうで修正しない方がいいのではないかとご意見。単純に訂正でこういう文章のほうがいいのではないかとご意見。

#### 【委員長】

ご意見いただいた話より、もともとあった文章のほうがメッセージが伝わるのではないかというのが委員会としての意見である。それを反映して、パブコメに対する回答としても、ご意見をいただいて、委員会で議論した結果、そのままの文言のほうがいいと判断し修正はせずにいきたい。

まだ、ご意見をいただいている委員からご意見をお聞かせ願いたい。そのまま黒い字の方が二つの要因があって、いじめや不登校などの問題があるということは伝わっているし、委員が言ってくださったように、背景と日本語能力の理解というところがあえて別になっているので、上の文章の方がなじむというようなご意見だったと思う。

皆が違和感がないということであれば、委員会としては、「元あった文章のほうが適切な表現である」といった回答をしていただけるといい。

#### 【副委員長】

元のままのところ、日本語が十分に理解できないことや、文化的背景の違い等がそれぞれの原因になっている。下で直したほうが、違いがある。と切って、「そのことが」と入れると、「就学や不登校の原因になっています。」とした方が、文章が分かりやすい。

#### 【事務局】

委員会で議論してきたことのニュアンスが変わってしまう。このように変わってしまうことであれば、委員会での議論を尊重した上でそのまま残します、という回答がいい。

**【副委員長】**

ニュアンスは何も変わらない。

**【委員長】**

このままいくと、文化的背景の違いという原因があって、その下に二つあるというのと、二つの原因があって、無就学やいじめの問題があるというニュアンスが変わるということだ。ニュアンスは上の方がしっくりくる。

下の文章でも、服委員長が言っているように、文章の文言に修正をかければ同じニュアンスは戻るだろうと言ってくださっているだけで。

ただ、無理に修正をかけるより、元ある文章でいいのではないか。伝えたいニュアンスのことをここで話し合っていたきたい。一つのところで、右でもない、左でもないと言っているのも、次の議論に進めない。割と論点は絞られてきたので、あとは委員会と意見をまとめさせていただく。

元の文章のほうが、我々の議論としては、適切な表現であるというご意見の方が多くればそのまま変えないことにするし、やはり文言の修正が必要あるということであれば、もう一回考えていきたいと思うが。

**【委員】**

文化的背景の違いをお互いに理解できないから、無就学であったり不登校になるのだから、文化的背景が違ったり日本語ができないから無就学や不登校になるというのは違う。

**【委員】**

理解が進んでないからそういったことが、起きているのが現実だ。

**【委員長】**

先ほど副委員長にも言っていたところだが、「原因にもなっています。」という文言で、そういうことが含まれる原因であるというニュアンスが伝わるのかなと思うが、いかがか。今のところを解消するのであれば。ただ、全部あるから全部書こう、全部書かないと意味が伝わらないのでは、なかなか文章には紡ぎきれないところがあるので。

**【副委員長】**

やはり、「日本語が十分理解できないことや、文化的背景の違いが原因になっています。」とすると、これだけが原因のようになってしまうので、「等もあり、そのことがいじめの発生等の原因にもなっています。」他にもいろんな原因があるので、そこを少し和らげるように。それだけじゃないようにすればいかがか。

**【委員】**

下の残した文章も、「が」を「も」に変えたりしていても、柔らかくて、そういったニュアンスにならないか。

**【事務局】**

それだと「ニュアンスが変わってしまうのではないか」ということだったので、もし表現を変えるのであれば、仰ってくださったような元の文章をベースに、双方が理解できていないことを含めるような表現の仕方にされたほうがいい。

**【委員長】**

もう一度確認して、他の委員の皆さんのご意見も聞きたい。斜線が引かれていて読みづらいが、それを生かした表現として、「日本語が十分理解できないことや、文化的背景の違い等があり」というのを加える。

**【副委員長】**

「そのことが」というのも入れる。文章が一度区切れると読みやすい。

**【委員長】**

「そのことが、無就学や不登校、学習意欲の低下、いじめの発生等の原因にもなっています。」か。

**【委員】**

こちらの文化的背景のほうが先でいいのではないか。日本語ができて、文化が違うこともあるので。

**【委員長】**

概念的に文化的背景の違いが先に来るべきではないかと。「文化的背景の違いや、日本語が十分に理解できないこと等があり、そのことが無就学や不登校、学習意欲の低下、いじめの発生等の原因になっている。」というのが、皆さんの意見をいくつか抽出させていただいた結果だ。

**【委員】**

原因というよりも、「つながっていくこともあります。」のほうがいい。

**【副委員長】**

原因というのがきつい表現だ。

**【委員】**

「できない人がいます。」ではなく「できないこともあります。」そういう表現の方がいい。

**【委員長】**

「文化的背景の違いや、日本語が十分に理解できないこと等があり、そのことが無就学や不登校、学習意欲の低下、いじめの発生等につながることもあります。」でどうだろうか。皆さんの伝えたい趣旨が伝わっているか。「等につながることもあります。」

**【副委員長】**

「等」がたくさん入っていますが、実際にはすごく強調される。「その日本語が不十分だ。」とか「文化的背景の違いが原因だ。」と言ってしまうと。だから、今のでかなり文章が柔らかくなった。

**【委員長】**

プラン案の中の文章では、今のような修正をし、パブリックコメントに対する考え方としては、「いただいた意見を参考にしながらこのように修正しました。」という回答をするということでもいいか。

では、プラン案の文言の今のような議論が、もう少し皆さんの気持ちの中にあるでしょうから、パブコメに対する部分とは別に、プラン案のほうの具体的な修正なり、皆さんのご意見をいただく時間にしたい。先ほどのところだけ修正していただいて、回答していただくということよろしいか。

引き続き中身の議論に入る。(指針)(案)の中で、いくつか皆さんから修正が必要なところや、こういう表現の方が妥当だということがあればお願いしたい。

**【委員】**

6 ページの年齢別人口の状況のスケールの単位はいらぬか。

**【事務局】**

入れたものに修正する。

**【副委員長】**

脚注の話だが、※1 等で先に下のコメントのほうに目がいて、本文のどこに※1 があるのか分かりづらいので、もう少し工夫できないか。

**【委員長】**

脚注の書き方だが、二つ解消方法がある。本分のほうの脚注したい文言に「」（かっこ）をつけるか、文言そのものを脚注のところにもう一度書いた上でその説明を書くというやり方がある。脚注で「生徒」のところに※（こめじるし）が付いているが、どこまでの言葉を説明しているのかわからないので、本文中の脚注は本来その脚注の入った番号を含めた分に「」をつけるのが通常使われ方かと思うが、「」は別に使われているので、分けたければ、下の脚注のところに説明している言葉そのものを書いた上で説明文を加える方法がある。

**【委員】**

例えば7ページで※4で生徒だけではよく分からない。この、文言の説明が長くなってしまふので、ライン等の方がいい。

**【委員長】**

そのあたりは、見せ方の問題なので少し工夫をしていただきたい。「」（かっこ）は他の文章中に出てくるので意味が変わってしまうと困るので、ラインというのは一つのやり方。

**【委員】**

これは多文化共生のためのプランなので、最終的には感じのいいものができると思っている。そこをこだわって考えたときに西暦を入れてほしい。ほとんどが西暦で書かれているが、脚注は平成になっている。

**【委員】**

内訳のところを見ると、特別定住者の方もかなりいる。オールドカマーの方達に全然触れていないということが気になる。

**【委員長】**

それは、逆に背景として多様であるという中に含むものとして考えていかなければならないという意味では、行動計画のほうで具体的な支援をする場所とか、連携する相手とか、という時には意識していかなければならないものだと考えている。

逐一書いていくと、それぞれの区別をしないといけなくなるし、あえて指針の中でオールドカマーというのはさまざまな背景をもったという中に含まれているし、そういう含んだ意味として認識をしていく必要がある。

ただ実務的に、これからの行動計画においては、それぞれ個々の課題があるので、そこには踏み込んだほうがいい。

**【事務局】**

特に、高齢化しているオールドカマーのデータも入れていった方がいいということか。

**【委員長】**

その意味で言うと、そもそも文言の説明のいる言葉として不足していないかというところも含めて、これで趣旨が変わるものではない。この文言もちゃんと説明しておこうというものは、丁寧に説明していきたいので、今事務局のほうでこの文言には説明があるだろうというものを書いていただいているだけなので、僕たちもこの業界にいるので当り前のよう使っている言葉もどうしても出てきてしまう。他に皆さんのほうで何か脚注を加えたいものはあるか。

**【副委員長】**

※1のところでは子どものことだけのように見えるので、「外国にルーツを持つ人のこと」と加えるということでしたが、「外国にルーツを持つ」という言葉が7ページのところに出てくるので、ここの脚注で「外国にルーツを持つ」と先に出てくるとおかしいので、ここで「外国にルーツを持つ」ではなく、何か表現をもう少し変えられないかと、議論を聞きながら考えていた。

今すぐにはどう直したらいいか分かりにくい。ここでそこまでの説明をしなくても、資料の表などにいろいろ書いてあるので、ここでいう外国人住民はというのはもっと単純にしてもいい。

**【委員長】**

そのままの言葉をとらえていただいて、外国人住民でも確かにいいかもしれない。

**【副委員長】**

プランの導入部でこんなに色々書いてあってもあまり見栄えがよくない。

**【委員長】**

そういう意味では事務局案として出ているが、何か付けた思いや、こういう意味合いでということを書いていただいて、天秤にかけたい。

事務局側で、ここで説明を加えたいという思いや、説明を加えたい動機を教えていただいてもいいか。

**【事務局】**

従来、外国人という言い方をされていて、外国籍のある方というのが通ってきた表現だったと思うが、こちらにあるとおり日本国籍をお持ちの方でも外国人住民に含まれる方が増

えてきたという印象がここ数年ある。その説明をあえて入れたが、ご意見のとおりなくしてもいい。

**【委員長】**

ただ、その外国人住民という言葉そのものに含まれるのか。外国人住民はあくまでも国籍における区分ではないか。

**【副委員長】**

単純に、今まで言っていた外国籍住民と認めてもらってもいいのか。

**【委員長】**

外国籍住民という言葉の意味そのものに含まれるというのを言われたということか。ということは、逆に外国籍住民が外国人住民に変わってきた経緯の中にそれは外国籍ではない人も含まれているということか。

**【事務局】**

特に子どもにそういうことが増えてきている。

**【副委員長】**

それでも、日本国籍の方は外国人住民とは言わないのではないか。だから、外国にルーツを持つ人、持つ子どもと言うようになったのであって。

**【委員長】**

行政用語として、「外国人住民」といった言葉の枠の中に日本籍であっても外国籍の親がいれば外国人住民に含んでいるのか。その子は日本人住民ではないのか。日本国籍の子どもでも片方の親が外国籍だと外国人住民と行政の中の区分になるか。

**【事務局】**

ならない。

**【委員長】**

「中長期に 90 日以上滞在をする外国人の方々はその住民として扱われます。」という説明をしていただくことが本来であって、ここに書いてある文章はそれとは違う文書が書かれている。外国人住民という言葉が単に日本にいる外国人ではなくて、その市民であるということを定義した言葉として説明したいということではないか。

そうすると、今のはこの文言とは違う文言になる。今言っているように、例えば外国人

住民、つまり住民票を得る外国人がどういう位置付けになるか。今で言うと、90 日以上、中長期滞在する外国人は住民票が得られる、申請ができる。その説明をするべきではないか。

**【事務局】**

「同じ住民として、当然同じサービスを受ける権利がある。」という意味合いである。

**【副委員長】**

本文にそれが説明してあるので、混乱するような説明は要らない。大まかな外国人住民で、そのさまざまな背景を持ったという中に、片方の親が外国籍であることや、日本国籍でずっと外国に長く住んでいた帰国子女の方もいるし、さまざまな背景を持ったということに凝縮されるのではないか。ここは施策の部分とは違い現状なので、コメントをカットしたい。

**【委員長】**

今事務局が言っているのは、外国人住民という立場を少し明確に伝えたいということ。ただ日本にいる外国人ではなく、暮らしている外国人ということで、外国人住民という言葉が使われ出している。その説明をきちんとするのであれば、説明内容は少し変えていただきたいが、先ほど言ったことを外国人住民の説明する言葉の一つとして位置づけにすることは悪いことではない。

ただ、単純に外国人住民と聞いた言葉の響きのまま読んでも、問題はないところだ。それは少し他の委員の皆さんのご意見を聞いた上で集約したいところであるので、皆さんの中で外国人住民という言葉が少し馴染みのない言葉として、一般の方に知ってもらいたい、理解してもらいたい言葉であれば、注釈は必要であるし、あまりそこにこだわる必要はないのではないかという副委員長の意見に近いかどうかというところで、他の委員の皆さんはいかがか。当事者の方はいかがか。自分たちが聞いたときにちゃんと説明をしておいた方がいいか。

**【委員】**

外国籍住民とか外国人住民にすると、単純に外国から来た人というイメージがある。だが、外国にルーツを持つ子ども等も念頭に入れるのだったら、例えば「外国籍住民もしくは外国人住民および外国にルーツを持つ住民が増えています。」など付け加えた方が、私たちの気持ちや事務局の意図するところもくむことができる。ここで、また外国にルーツを持つということを説明しているのだが。

**【委員長】**

出てくる言葉として、先に出てくれば、7ページで言っているよりも、先に出てきている方がいい。

**【委員長】**

シンプルにするのならば、留学生や日本人配偶者等とかつて書いてあって、様々な背景を持ったと来ているので、「様々な背景を持った住民が増えています。」に全て含まれるのだが、いかがか。

**【副委員長】**

あとに外国人住民という言葉がたくさん出てくるが。

**【委員長】**

外国にルーツを持っているということも入れればいいかなと思うが、色々入れて煩雑になるのであれば、住民という言葉だけでも伝わるかなという意見の一つである。

**【事務局】**

みんなが住民です。ということを伝えたいということによろしいか。

**【委員長】**

事務局の方の願いとして、外国人住民が住民であるということを言いたいということと、委員の皆さんの感じられる言葉の定義と、少し違いはある。

それを踏まえた上で、外国人住民と書いて説明をしない、あるいはするという考え方と、外国人住民や外国にルーツを持つ人が増えているという書き方をして、外国にルーツを持つということだけを説明をする。外国人住民はそのまま言葉として外国人ということが伝わるのであれば、というぐらいが今出ている議論だが、どの意見に近いとか、もっとこういうものもあるなど、ご意見をいただきたい。まだご意見いただいていない委員の皆さんはいかがか。

**【副委員長】**

これを英語やポルトガル語などに翻訳した場合、結果的には同じようになるか。

**【事務局】**

翻訳するときに。ぴったりの言葉がある。英語でも、住民とは本当に大事なところである。ポルトガル語などでも住民はとても大事である。

**【委員長】**

日本人・外国人ということと、住民という言葉に違いがあるということ。しかし、その言葉は書いてあるので、日本語で外国人住民と書いてあるので、住民ということか。

**【事務局】**

日本人が読んだ時に、外国人住民という意味がどれくらい伝わるかということだ。「外国人は外国人じゃないか」と。「やはり住民だ」ということが伝わるのであればいい。

**【副委員長】**

住民という言葉を使っていたら伝わる。そこに、いろんな背景を持った住民が、うちの自治体にも彦根市にもいます、という感覚は入ってくる。

**【委員長】**

住民という言葉だけでも自然と伝わるイメージがそれほど相違がないということで、注釈を付けないということが優勢になってきたが、それに関してご意見はあるか。

それでは、事務局は下の注釈を消していただいて、そのまま文言としては「外国人住民が増えています。」「外国人住民の人口が増加しており。」というようにしてもらいたい。

**【委員】**

外国人住民という言葉がずっと出ていて、その概念でずっと流れている中で、教育の状況 7 ページのところで、あえてここで「外国人児童・生徒」というのは出てくるのはいいのか。「外国にルーツを持つ児童・生徒」という言葉で表現する必要がある背景があるのか分からないが、前の「外国人児童・生徒」という言葉だけで説明できるのであれば、あえてこの「外国にルーツを持つ児童・生徒」とは、それがまた注釈として下に入ってくる。それはどう扱えばいいか。

**【委員】**

これはあえて言わなくてもいいのではないか。

**【委員長】**

今のご意見を採用するなら、「また近年は、外国人児童・生徒を含めた」という文言の方がなくてもいいくらい。「外国にルーツを持つ児童・生徒」の増加・多様化していることが伝えたい内容ですごく大事なところだ。

どちらかという上で「外国人生徒はこれだけいます。でも近年は外国にルーツを持つ生徒が増えています。」とあって、下に「外国にルーツを持つ児童・生徒」の説明が下に入っているの、「外国人児童・生徒を含めた」というところを切った方が伝えたい内容が残ってシンプルになる。

**【委員】**

その「外国人児童・生徒を含めた」のところを切ったら、その上に注釈の内容をきれいにして、本文に持って行って、その上で外国にルーツを持つ児童・生徒のこと。その中で、説明できないではないか。本文に入れてしまった方が存在感もある。

**【委員】**

※4の脚注を使うのはここだけか。

**【事務局】**

後にも言葉は出てくる。

**【委員長】**

教育の現場において、外国人の児童・生徒という切り分けだけして考えるのではなく、もう少し、実際に日本国籍の生徒でも同じ課題を抱えている生徒がいるので、その幅をちゃんとフォローしましょう、という意味では教育の中では外国にルーツを持つ子どもを、かなり意識がされている部分ではあって、あえて取り上げているところもある。

議論が少し煮詰まってきましたので、少し整理をする。委員から外国人児童・生徒を含めたというところの文言がダラダラと表現されているのではないかとということで、「外国にルーツを持つというところを書かなくてもいいんじゃないか。」ということだったのだが、私と委員の意見は同じで、どちらかというと「外国人児童・生徒だけではなく」ということを表現したいという意味ではそれは残していきたいと思っている。残していくところで、別の委員からは、外国にルーツを持つということの説明を「近年は」と「外国にルーツを持つ」の間に入れてしまってもいいのではないかとのご意見が出ている。委員の言っていることで難しいと思うところは、下に書いている注釈のままでは難しい。外国にルーツを持つ子どもの説明としてはいいが、上に入れようとすると文書を変えないといけないので、そこを含めて考えないといけない。

**【委員】**

言いたいことは何かと言うと、細かいところは必要かどうか。教育の現状として、多様化しているということ。いろんな国の方が教育の現場に入ってきている。こういう流れがこうなっていますよ、というだけの説明だ。

**【委員】**

そういうわけではない。親は日本では学校に行っていない。自分の国で学校に行って、大人になっているから、親子で違う文化の中で生きていることになるし、やはり外国人児

童・生徒だけでくくってしまうと、漏れてしまう生徒が出てきてしまうことが、ものすごくある。両親とも日本人でも外国で生活してきた子は大変という現実もある。

**【委員】**

そのことは、これからの多文化共生の中で非常に大事なことだが、使い分けていけないといけない、頭の中でしっかり分けていけないといけないことか。

**【委員長】**

逆に言えば、分けてはいけない。

**【委員】**

だから、あえて私は一つの表現というか、多様化していることだけ出しておけばいい。

**【委員】**

あえて、そう書いてあるのは表や棒グラフが外国籍の子どものことのことを書いている。だから、ここに含まれない子どもがいるということをしかりと表現しておきたいと思う。

**【委員長】**

同じ課題を抱えている子どもがいる。数字だけでは見えないけれど、同じ多文化の課題を抱えた状況があるということが言いたい。

**【委員長】**

この統計自体には表れないものもある。逆にそれを伝えたい。分からないから入っていない。これは単純に国籍別で学生数を数えているだけだ。しかし、そうすると日本籍の中に言葉がなかなか話せない学生が含まれていたりする可能性がある。それだけではないですよ、ということも伝えたい思いがある。この表そのものの説明をしているわけではない。

**【委員】**

この、下の「近年～」のところは、この後に出てくるか。

**【委員長】**

実際のプラン中、教育の現場のところに出てくる。

**【副委員長】**

日本語の支援の必要な子どもはこの表以外にも多いですよ、ということ。

### 【委員長】

どちらかというと、教育の現場では逆に外国人の児童・生徒というよりはそれも含めた外国にルーツを持つ児童・生徒という見方をどんどん使っている。だから、それを含んだ概念として、先ほど委員の言っている意味として、もう少し広い意味として外国にルーツを持つという言葉があるという説明を先にしておいた方が後へのつながりとしてはいい。

ここでカットしてしまったら、言いたい内容にはそぐわないか。思い切って「外国にルーツを持つ児童・生徒の増加など、状況が多様化しています。」とシンプルに言ってしまい、下に「外国にルーツを持つ」ということの説明を入れること。あってもいいとは思いますが、委員の意見もあったので「外国人児童・生徒を含めた」を省いてもいい。別の委員の意見で、そこにもう少し外国にルーツを持つ児童・生徒の言葉の意味を説明して、下の注釈を省いてしまう。という意見だった。これについて他の委員の皆さんのご意見はいかがか。

### 【委員】

外国にルーツを持つ児童・生徒の中には外国籍の子どもも日本国籍の子どもも含まれるということか。

### 【事務局】

このデータの中にも、例えば日本人と結婚して片親が外国人であってもその子は日本国籍になるので、この統計の中には含まれない。

しかし、外国にルーツを持つ子どもはそういう状況だけではなく、両親が外国籍であっても日本で生まれて日本の教育を受けて育てている子どもも、こういうルーツを持っている中には入っている。国籍も外国だからこの統計にも含まれていることになる。

### 【委員長】

事務局をお願いして、皆さんの伝えたい趣旨は聞いていただいた。伝えたい趣旨に沿って文章を変えていただいてもいいか。

### 【事務局】

事務局でも、ここの文章を作るとき、最初はただの外国人児童・生徒が増えているということだったが、こういった日本国籍の児童・生徒でも教育が十分でない子がいるということで、この外国にルーツを持つ児童・生徒という文言を加えた。外国人児童・生徒の兼ね合いということで、ただ先ほど委員さんも言われたとおり、この表自体が外国人児童・生徒だけになっているし、この「外国人児童・生徒も含めた外国にルーツを持つ児童・生徒」という方がくくりも広いので、外国にルーツを持つ児童・生徒とだけ書くと、これ自

体が何だろうとなってしまうので、二重書きのようになってしまいが、「外国人児童・生徒も含めた外国にルーツを持つ児童・生徒」、もっと外国人の児童・生徒以外にもいるということを書いたかったものである。

**【委員長】**

その意味では事務局案のままでいく意見もあったということ。

**【委員】**

外国人児童・生徒じゃない外国にルーツを持つ児童・生徒が、私たちはイメージができるけど、どういう子どもたちがいるんだろうとイメージできない人の方が大半だと思う。だから、イメージできるような表現をしていただくと後々の教育のところで外国にルーツを持つということが出てくるので、そのイメージを膨らませてから読んでもらった方が、必要だということを理解してもらえる。

**【事務局】**

脚注のところをもう少し具体的に書いた方がいいかもしれない。

**【委員長】**

上の文言としてはこのまま書いていただいて、下の脚注のところでもう少し具体的な子どもの状況を加えて、今は言葉の説明しかないので、「こういう状況の子どもを含んでいます」ということが分かるようにしてください。

**【副委員長】**

もう少し丁寧に説明をする。今の多様な子どもがいますということ、どのように多様なのか分かるようにすればいいか。

**【委員長】**

皆さんの中で言っておきたいことや、気になることがありましたら、ご意見をお願いします。

**【委員】**

意見はどの場所でもいいか。4のプランの体系図を見ていて感じたことが基本方針二つ目の「地域社会の人権意識が向上すること」で、向上する事よりも、「全ての市民の人権が尊重されること」など、意識が向上するだと、テストで100点とるみたいな感じになっているので、「尊重される」というような方が、人権が尊重されていくと言う方がいい。

**【事務局】**

地域社会だけではなく、全ての場面において人権が尊重される。限定的な話ではない。人権尊重の意識というのはそれで通じる。特に地域社会に限定する理由はないと考える。

**【委員】**

人が出てこないから、「全ての市民の人権が尊重されていく」というような方がいい。人権が尊重されていく。で矢印が右に行っているが、そこで4分の1上げているけれども、それと関わって矢印の先の基本施策がどれになるのかなと思って見ていた。

**【事務局】**

イメージとして全部突き刺しているのではないか。横が横に対応するというわけではない。基本方針の全てが基本施策の全てに反映されているイメージとなる。

**【委員】**

基本施策が全部で11あると思うが、人権が尊重される、人権意識などに関わって書いているのが、強いて言えば3(1)にあたるか。

**【事務局】**

この体系図は、この第3章、第4章の見出しを図案化したものである。地域社会の人権意識の向上というのも9ページにも書いているが、お互いの立場や文化的背景を認め合うというのは、人権尊重の一種であって、一人ひとりの個性を尊重する機運が高まり、全体の意識が向上するという事なので、尊重も含んで全体の意識が向上するという事で、このような見出しにしている。

基本方針や基本施策もどれがどれというのがなかなかない。いくつか該当するものもある。個別にこの人権意識の向上する事が基本施策のこれに当てはまるというのを、個別に当てはめていくことは難しい。

**【委員長】**

委員の言いたいことは、意識が向上するという事よりも、人権が尊重されるという事の方が大事というか、広い意味での言葉の範囲になるのではないかということか。人権の意識が向上するというよりも、人権が尊重されるという言葉の方が正面に出る言葉として望ましいのではないかという議論だ。

**【委員】**

人権が尊重されるということは、人が人として大切にされるということであり、それは後ろにかかってくる教育の環境づくりだったり、いろいろな環境づくりだったりいろんな所にかかってくる。

人権が尊重されること、人が人として大切にされることというのは、向上することという固い表現よりも、良いような気がするし、次につながる。

**【委員長】**

事務的なこともあって、パブリックコメントを出した後の文言をどこまで修正できるかというところで、ただ僕としてはここで議論したことは尊重してほしいということを言っている。事務局としても、ある程度全体の趣旨が変わらない範囲の中では委員のご意見を尊重したいということで、今は十分ここでの議論を踏まえて変更が可能である部分だと認識するので、皆さんのほうからご意見をいただきたい。

その意味で言うと、もしその文言が変わるのであれば、9ページの(2)で、「機運が高まります。」で終わってしまった方がいい。

**【委員】**

意識がゴールではなく尊重がゴールだと思っているから、最後に向上に繋がりますというのはいかがか。

**【委員長】**

向上したことによって、一人ひとりの人権が尊重されます。人権の尊重が上位語にあって、その中に「人権の意識が向上します」というのが含まれているというニュアンスか。最終的なゴールは個人の人権が尊重されることであって、そのためには、一人ひとりの人権の意識が向上していないといけませんが、行き着きたい社会の在り方は人権が尊重される社会という方が向かうべき道だということか。

**【部長】**

(2)だけを議論していいのかということか。

**【委員長】**

それをいうと(3)が、そういうことのゴールのところだ。(1)も外国人だけの話になっているから、個別に、そこまでの段階であるにしる達成したい目標として、外国人住民が社会にも入って来られることを目指す。人権意識が向上することを目指そうというのが、達成していった、多文化共生の意義で4つ並んでいる意味なのか。

(1)の基本目標の中に一人ひとりの個性が発揮される、対等な立場でというのが含まれているので、最終のゴールはそちらで表現されているとするなら、個別には特に間違ったことを言っているわけではない。

**【副委員長】**

意識が向上されても実際に尊重がされなければだめ。意識の向上とは啓発の活動など、狭い感じになってしまう。委員が言うように、そうしてしまった方がいいかもしれない。別に他の所まで変えてしまうのは大変なので。ここは、先ほど事務局が言っていたが、地域社会は地域社会でここに入れておいてもいい。どこでも人権は尊重されないとはいけませんが、そういう地域を作るという基本方針だから。地域社会で人権が尊重されることでもいい。

**【委員長】**

そこを変えたからと言って、すべての意味が変わるという感じではないので。(2)の文章の中に「一人ひとりの個性を尊重する」「機運が高まる」というのが書いているから、それが表に出てきても、整合性はとれる。

**【委員】**

9ページの第3章の「ともに」の解釈で「すべての市民が対等な関係」とありますが、わざわざここで解釈する必要がない。今まで対等ではなかったのという風になる。

**【委員長】**

それを言うと「ともにいきいきと暮らせるまち」という表現だけで十分伝わる。

**【副委員長】**

支援というのが、上から目線の支援と捉えられがちなので、支援と言っても、対等な関係の支援ですよということが1回目、2回目のところでも強調し合っていたのではない。

**【委員】**

でも、「すべての市民が」ここまでがあったから、対等な関係や支援であったら分かるが、主語が「すべての市民」なのでここから読んだら、対等じゃなかったのという風になる。

**【委員】**

対等という言葉はそういうところから出てきたと思うが、「お互いを理解しあい」とか、「共に理解しあい」とか、いきなり対等ではなくて、理解することによって結果対等な人間関係が気付いたりする。

**【委員】**

ここであげると、人権的にどうなのか。

**【委員長】**

まず、委員が言ってくださった部分で、多文化共生の意義の(2)で、委員としてはどうか。「一人ひとりの人権が尊重されること。」というくらいか。

**【委員】**

それなら、委員が言ったように、いろいろな環境づくりにつながっていくということが分かるが、人権意識の向上することっていうと、イメージがあるし、でもいろいろお話を聞いたら、連なっていることがいろいろ書いてあるので、分かったなという感じだ。

**【委員】**

ここで、さらに高まるという言葉を入れると、今までも「人権のまちづくり懇談会」などをずっとやってきて、そこに外国の方も一緒にやっていく意識が、そういうことが動き出した、さらに気運が高まってきて、今までもやってきたのが、さらに良くなったような表現になるのではないか。

**【委員長】**

それはある意味で委員が言ったような、今現状ができていないのかというところに関して、今の継続の中で今後も続いていくということが表現できるということか。人権意識の向上という意義か、人権が尊重されるということが異議としてふさわしいか、というところで、また意見をいただいているというよりは、どちらが望ましいかというところで、それぞれのお立場でご発言をいただきたい。

**【委員】**

私も最初は「人権を尊重する」という方がいいかなと思ったが、この説明文を見ていると、十分に人権が尊重するということが書かれているので、このまま「人権意識を向上する」でもいい。

**【副委員長】**

さきほど言ったように、「人権意識の向上」というのを、ここから取ったらいいのではないか。2の表は「人権が尊重されること」で十分だ。

**【委員長】**

このままの文で、説明文のほうに含まれているのでいいのではないかという意見が多いので、事務局案でいきたい。もうひとつ、9ページの基本目標の方で、「ともにいきいきと暮らせるまち」は割と言いたいことが伝わっているかなという気がするので、このままでいいか。ただ、この注釈のところで「ともに」と「いきいきと」という言葉に少し意味を持たせるということで、事務局案のほうでは説明を書きいただいているが、「すべての市

民が対等な立場で」というところで、ここに「対等」という言葉で書いているのが、かえって違う立場を強調しているという意見で、委員からも「お互いを理解しあい」という方が、「ともに」の言葉の意味として望ましいのではないかという意見をいただいたがいかか。

確かに「ともに」という言葉の意味からすると「お互いのことを認め合い」という方が「ともに」という言葉の伝わり方は柔らかくなるし、言いたいことが伝わるかと思う。事務局案で、「対等」という言葉を使っていたのは、これまでも支援だったり、いろいろな議論の中で、その当時対等という方がいいのではないかというのは、確かに出たので、それを尊重していただいた。

#### 【事務局】

これまでの議論を含めて、委員会で出てきた言葉なので、特にエンパワメントとか、個性の発揮というのを、言葉として入れたかった。その記載をすることによって、このプランの強調したいことの一つになるのかなという思いがあった。

#### 【副委員長】

全ては読まないで、「ともにいきいきと」って、「ともに」ってどれだけの「ともに」か。男女の関係も「ともに」ではないか。ここでは、多文化共生というのは外国人住民も日本人住民もということは何回も出てきているけど、「対等」より「お互いを認め合う関係」など、少し解説をしておくのはいい。

まだまだ多文化共生はこの言葉そのものの市民的なコンセンサスを得られている訳ではないので、それを広めていくためにも「多文化共生って言うんだな」って言うのを。多文化共生の意味の説明にもつながる。

#### 【委員長】

まだご意見をいただいている方、賛成か反対かを含めてご意見を含めて頂いた方が結論に近づける。

#### 【委員】

あった方がいいと思う。「対等」というのは抵抗がある。

#### 【委員長】

変えるなら、「対等な関係」というのを、もう少し柔らかい言葉で「お互いを理解しあい」「認め合う」などの言葉に変えるのはどうか。

#### 【委員】

私もあった方がいい。ただ、「対等」の代わりに「お互いに尊重しながら」とか、そういった言葉で説明をした方がいい。

**【委員長】**

注釈を書くには書くが、今言っている文言修正の所で「すべての市民が」は残して、「対等な関係」を少し整理したい。「お互いに認め合い」「お互いに理解し」「お互いに尊重し」そのぐらいが今出ているキーワードだ。

**【委員】**

「お互いに手をつなぎ合って」というようなことはどうか。手をつなぐではなく、一緒にというのはどうか。

**【委員長】**

「お互いに」は決まったとして、「尊重しあい」か「認め合い」の2つで皆さんの伝えたいメッセージが伝わると思うが、いかがか。

**【副委員長】**

私は「尊重しあう」がいい。尊重というのは、先ほども言われている、人権の尊重や、尊厳。相手の人権やお互いの文化を尊重しあうものだ。

**【委員】**

すべての市民が「お互いに」でなく「お互いを」尊重しあうという方がいい。

**【委員長】**

事務局の方で文言の修正をしていただくということによろしいか。「すべての市民がお互いを尊重しあう関係」か。

**【委員長】**

説明すると煩雑な気がするが、読まないと分からないという意味では読んでいただくことが大事だ。最終皆さんの中でどうしても言いたいご意見だけでも頂いていきたいと思うが、その他の部分で何かあるか。

事務局に質問も含めてだが、プランの体系図のこの図は来年度に行動計画を策定した時点で修正が入って、ここの部分になにか文言が入るようなイメージで今捉えたらいいか。行動計画で定めると書いているが、これで体系図としては完成か。それとも、そこに文言が入ったものが体系図として完成か。

**【事務局】**

できるだけ分かりやすいようにしたいと思っているので、そういったことも考えていきたい。

**【委員長】**

この中に指針の部分と行動計画の部分と分けてほしい。ここまでが決まった部分であって、それに従った行動計画が付いてくるという色分けを指針の中でしていただくようお願いする。

では、これまで、熱心な議論をありがとうございます。皆様のご意見をなるべく最大限反映させた形で、提言するものを完成させたい。内容の協議はここまでにさせていただく。

それでは、以上をもちまして、本日の議題はすべて終了した。これにて委員会を終了させていただく。次年度にこの指針に従った行動計画ということで具体的に市の中でもそうですし、市民の活動を含めてさまざまな多文化共生にかかわる具体的な行動計画を立てていくということで話が進んでいる。

また、その委員会に関してはここにおられる皆さんも少し変更があったり、またお願いしたりする方も出てくるかなと思うが、また行動計画を立てるのに適当であろう人選を、事務局にさせていただいた上で、来年度の行動計画を策定する委員会を継続していくとなっているので、またお声掛けをさせていただく際は、それぞれにお立場やお仕事もあるかと思うが、またぜひご協力いただきたい。もし、委員を外れられても少し関心を持っていたいて、ぜひパブリックコメントなど積極的にしていただくなど、今後もこの委員会、あるいはこの策定に関してかかわっていただけたらと思う。長時間の議論ありがとうございました。そして1年間ありがとうございました。私の理事・進行はここまでにさせていただく。本当にありがとうございました。

**【事務局】**

皆様1年間ありがとうございました。事務局の運営に関しては至らぬ点が多々あったと思う。次年度の行動計画の策定委員会につきましても、新たな体制になるが、よりよい運営に向けて改善をしていきたいと思うので、お気づきの点は委員会終了後にお聞かせいただければ幸いです。それでは、お忘れ物のないように、お気をつけてお帰りください。誠にありがとうございました。

(仮称)彦根市多文化共生推進プラン策定委員会委員長

森 雄一郎

---